

水稻二期作栽培法に関する研究

第一報 一、二期稲の品種の組合せについて

未沢一男・小西薫・西村昭司郎

第二期稲(晩期)の収量は早植する程多く、且つ安全な品種が多いため、第一期稲(早期)には 7 月末までに収穫可能の早熟多収品種を栽培する必要がある。更に慣行の栽培法による場合、第一期稲の 7 月末収穫可能品種は一般に収量が低い傾向があるから、これ等早熟品種の多収化技術の確立が必要である。又一般に多収品種は熟期が遅い傾向があるからこれ等多収品種の早熟化技術の確立も必要である。尚第二期稲品種は一般に植付時期が異なれば不安定のものが多いようであるからこれ等に安定した品種の育成並びに栽培技術の確立が必要である。

将来水稻二期作をより推進発展せしめるためには以上の点を更に今後研究しなければならないと考える。

第一期稲(早期)栄光との組合せに、第二期稲(晩期)は農林 48 号及び農林 37 号を用いた二期合計収量は約 86Kg で必ずしも満足すべき収量ではないが本県の農業経営形態が依然として米麦二毛作を中心とするものである現況では麦価の先行き不安から充分期待される収量であり且つ冬季飼肥料作物の栽培が容易であり、家畜飼料の生産と併せて地力増強の一石三鳥の利を得ることが可能であると考え。尚この収量は今後の試験研究により更に増加するであろうと想像されるので水稻二期作栽培の将来は明るいものがあると思われる。